①

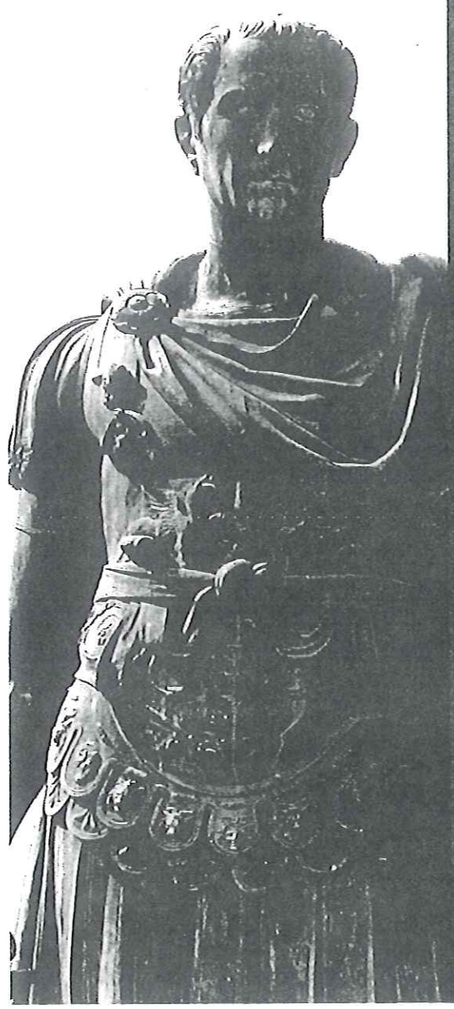
西はりまライオンズクラブ 人間学セミナー

令和三年九月八日(水)

ローマの名言一日一言

古の英知に心を磨く

渡部昇一＝編



致知一日一言シリーズ⑫

致知出版社

1月

abeunt studia in mores.

「仕事は性質となる」

6日 仕事は人間をつくる

「仕事は性質となる」

古代ローマの詩人オヴィディウス（前四三～後一七頃）の言葉。仕事をしっかりやれば、それはその人の性質となる、という意味である。

一道を貫いてきた職人の顔には、落ち着きと自信が現れている。それは時に悟りを開いたような表情にも見える。長い間どういう仕事をしてきたか。良くも悪くも、それがその人そのものになる。仕事というのは単なる生活の糧（かて）ではなく、人間そのものをつくるものだという洞察が重要である。

2月

scientia est potentia.

「知は力なり」

28日 知は力

「知は力なり」

ラテン語で"scientia est potentia."という。これは後世になって、十六世紀から十七世紀のイギリスの哲学者フランシス・ベーコンがモットーにした言葉である。

知によって自然科学の力を得た西洋諸国は知を持たない世界を征服した。知は大変な力であったのである。

3月

fallacia alia aliam trudit.

「一つの嘘は他の嘘を生ず」

14日 嘘に嘘を重ねる

「一つの嘘は他の嘘を生ず」

紀元前三世紀のローマの政治家・将軍ガイウス・テレンティウス・ウァロの言葉。嘘をついてしまうと次から次へ嘘をつかないと辻褄（つじつま）があわなくなってしまう、といっている。

そこから、「嘘つきは素晴らしい記憶を必要とする」という言い方もある。記憶力に絶大なる自信がある人以外、嘘はつかないほうが賢明である。

4 月

deus
operantem adjuvat.

「神は働く人を助ける」

5日 神の見方

「神は働く人を助ける」

一所懸命努力していると、天の一角から助けが降りてくることがある。ヒルティは、聖書の中にも働いていない人に天使が現れた話はない、といっている。

だからよく働けば、天佑神助（天の助けや神の加護）は必ずくると確信しているべきである。

5 月

consuetudine quasi
alteram quandam
naturam effici.

「習慣によって第二の天性がつくられる」

1日 習慣が人間をつくる

「習慣によって第二の天性がつくられる」

キケロの言葉。習慣というものが第二の天性となる。これは習慣の重視をいった言葉である。生まれつきの才能も確かに重要だが、習慣というものによって新たな才能が開花することがある。

ヒルティも『幸福論』の中で唱えているが、十九世紀頃のヨーロッパやアメリカの教訓書で一番重んじられたことの一つが習慣論であった。習慣こそが人格そのものになるという考え方が徹底されていたため、当時は若い青年でも早起きし、悪事を働いたり、酒を飲み過ぎて度を外すこともなかった。その頃の欧米は、地球の他の部分より断然活力があったといえる。

勉強もまた一種の習慣である。習慣とは人間そのものであるということを子供のときから教えたいものである。

6 月

non scholae sed vitae
discimus.

「我々は学校（学派）のためではなく、人生のために学問する」

11日 人生のために学ぶ

「我々は学校（学派）のためではなく、人生のために学問する」

幸田露伴などはこの言葉にぴったりで、自分の人生のために勉強したという感じがする。田辺元という哲学者は露伴を評して「雑学の塊」といったが、私はそうではないと思う。露伴は自分の関心のあるところを、彼の言い方でいえば「ヒタヒタと」攻めていったのである。露伴はどこを読んだって人生のために勉強していたことがよくわかる。別に教授になるためにやったわけではない、という言い方もできると思う。

7 月

mens sana in corpore
sano.

「健全なる精神は健全なる身体に宿る」

18日 精神と肉体

「健全なる精神は健全なる身体に宿る」

ユベナリスの有名な言葉である。実際は長い文章になっていて、その中に「健全な肉体に健全な精神が宿りますように」という願望を述べた部分がある。のちにそこだけが諺のようになって伝わったものである。戦争中の旧制中学などでは、体を鍛えることが重要であったため、この言葉がよく使われていた。

8 月

duos qui sequitur
lepores, neutrum capit.

「二兎追う者はいずれも取らず」

5日 二兎追う者は一兎も得ず

「二兎追う者はいずれも取らず」

「二兎追う者は一兎も得ず」という諺がラテン語にもある。これについて最近思ったのは、作家の塩野七生さんの仕事を見て、あの人は大学で教えなかったから『ローマ人の物語』のような立派な大書を完成できたのではないかということである。昨今の大学教授は講義に、学生指導に、教授会にとやたら忙しい。もし塩野さんが大学で教えていたならば、優秀な先生になった代わりに『ローマ人の物語』は書き得なかったかもしれないと思うのである。

9 月

quotidie aliquid addiscentem senescere.

「毎日何か新しいことを学びながら老いる」

15日 理想の老い方

「毎日何か新しきことを学びながら老いる」

ヴァレリウスの言葉。学ぶのは楽しい。毎日新しい何かを学びながら老いていきたい。これは理想の生き方である。

10 月

malum ne alienum feceris gaudium tuum.

「他人の禍を汝の喜びとなすことなかれ」

27日 他人の不幸は蜜の味

「他人の禍を汝の喜びとなすことなかれ」

ドイツ語で人に悪いことがあったのを嬉しく思う気持ちをシャーデンフロイデ（Schadenfreude）というが、これはそれを戒めた言葉である。

11 月

qui timide rogat, docet negare.

「恐る恐る乞う者は、先方に拒むことを教えるなり」

17日 借金の極意

「恐る恐る乞う者は、先方に拒むことを教えるなり」

セネカの言葉。お願いするときは、はっきりとお願いするのがいい。おずおずとお願いする人はかえって断られやすい、ということである。

借金を申し込むときも、変な時候の挨拶などを長々としないで単刀直入にいうほうがいい。おそらくローマでもそんなことがあったのだろう。ちなみにシーザーは借金の名人であった。

12 月

fortiter in re, suaviter in modo.

「事にあたっては勇敢に、態度においては柔和に」

1日 ローマ人の理想

「事にあたっては勇敢に、態度においては柔和に」

これはローマ人が理想とした言葉である。これと同じ言い方で、のちのイエズス会のモットーとなった言葉がある。イエズス会の神父というのは本当に柔和だが、一方で「殉教も恐れず」という勇敢さを持っていた。

また、チェスターフィールドというイギリスの政治家は、子供にあてた手紙の中で「事にあたっては剛毅に、そのときの態度は柔和に」と繰り返し述べている。

1月 4日 運を学ぶ

「運を他の人々から学べ」

運さえも学べる。運のいい人を見て、「あの人はなぜ運がいいのか」を考えればいいのである。

幸田露伴も『努力論』の中で、運のいい人を見て学ぶことを述べている。そこから発見したのが、惜福・分福・植福という三福の考え方である。いいことがあったときに驕らず、福を他人に分け与える心構えを持ち、あるいは積極的にいいことをやろうとする人には幸運がくる確率が高いようだと露伴は観察している。

1月 22日 学ばない人生に意味なし

「文字なき人の生涯は死なり」

文字を持たない民、あるいは文字を知らず、何も書き残すことなく死んでしまった人たちは、死ねばそれっきり永遠に消えてしまう。

これは見方を変えれば、多くを学ばずに生きた人は、死んでしまえばそれで終わってしまう、という意味にもとれるだろう。人生を有意義なものにしようと思えば、何よりも学ぶことが大事である。吉田松陰は獄中にあっても、一日生きたら、一日学ぶべしといって学問をやめなかった。

1月 23日 何のために生きるのか

「生命はもし汝がそれを利用することを知れば長し」

人生というものは短いものだが、それを十分に活かしきれば十分に長いものである。

そのためには、人生の早い段階で何のために生きるのかと自分に問いかけることが必要になるだろう。

5日 過ぎた時は取り戻せない

「生涯の時間はすべての者にとって短く、かつ取り返し難いものである」

生涯の時間は誰にも短く感じられ、そして取り返し難い。これはローマ人が抱いた実感であろう。ローマ人に限らない。あの孔子でも、川のそばに座って水の流れを見ながら「逝く者は斯くの如きか。昼夜を舎てず」といっている（『論語』・子罕）。これは孔子の晩年の言葉だと考えられるが、「もう自分はこれだけ年をとってしまった」という感懐が込められている。過ぎ去りゆく時への思いは東西を問わない。

11日 若返りの秘訣

「歳月の過ぎ去るのは速やかなれど、楽しく時を過ごす人の老いないことも確かである」

時間の流れが速いのは当たり前だが、楽しい時間を過ごす人はあまり老いないということも確かである。これは私も実感している。年をとって活躍している方とお話すると、いずれの人も人生を楽しんでいる。心の底に楽しさがあると、人は老いないものだ。

16日 受けた親切を語る

「親切を与えた人は黙るべし、受けた人は語るべし」

セネカの言葉。親切をしたことはいわないほうがいい。親切にされた人は、大いに語るべきである。

これは私も多少実行している。留学したとき、年とった両親の生活を賄うために白百合女学園のマ・メール（修道女のリーダー）にお金を借していただいたことがある。帰国したあと、毎月給料の五十パーセントずつを返済して、最後に利子を払おうとしたら、マ・メールは「それはいりません」とニッコリ笑われた。

その方が百歳で亡くなったとき、私は埋葬式に出席した。私がそのまま黙っていれば、この話はその方と私だけしか知らないのだが、貧しかった私を助けてくれた恩人がおられたということを世の中に忘れさせたくないという気持ちがあって、このことを私はしばしば語っている。

与えた親切はどうしてもいいたくなるものだが、これはなるべく抑えるべきである。しかし受けた親切は心掛けとしてなるべく語りたいと私は思っている。

18日 急ぐときはゆっくりと

「ゆっくり急げ」（festina lente）

これはギリシャ起源の言葉らしい。「急いで急ぐ」と忘れ物をしたりする。だから、むしろ急ぐときはゆっくりしなさい、というわけである。「この手紙は急ぎだから、ゆっくり書いてくれ」といったというアメリカの偉人の逸話も残っている。

この言葉は『ギリシア・ラテン引用語辞典』（岩波書店）をつくった田中秀央先生のモットーであるという。平澤興先生も好きな言葉であったというから、同じ京都大学つながりで伝えられたものかもしれない。

22日 過ちを改める

「過ちは人間の性なり、過失を固守するとは愚者のことである」

過つのは人間の常であるが、過失に固守するのは愚者の行いである。孔子はこれを別の言い方で「過ちては則ち改むるに憚ることなかれ」（『論語』・学而）といっている。ところが、人間はしばしば改むることを憚る。ゆえにこの言葉は重要な教訓になる。

なお、これと似た言葉に「過ちしを悔いる人は、ほとんど無罪である」もある。セネカの言葉で、過ちを改めれば、その過ちは消えているに等しいという意味である。

27日 生きる意味

「彼は永らく生活したるにあらず、されど永らく存在したるなり」

セネカの言葉。生活したこととと存在したことを区別して、ただ存在をしているだけでは生きる意味がないではないか、といっている。永らく存在した人はたくさんいるが、それは必ずしも永く生きたわけではないのだよ、と。

28日 死して後已む

「祭壇まで」

これは「最後まであきらめずにやるぞ」「死ぬまでやってみせるぞ」と勇気を奮い立たせるときの表現である。つまり、死して祭壇に祭られるまで頑張りぬくという決意を示しているのである。

29日 完成させてこそ仕事

「何ものか為すべきものが残っている間は、何ものも為したとは思わない」

ローマの詩人ルカヌスの叙事詩『ファルサリア』の中にある言葉。「何かまだやることが残っているうちは、まだ何もやってないように振舞った」という意味である。

つまり、仕事が完全に片付かないうちは「そこまでの仕事はやった」と考えず、すべて完成するまでは何もやらなかったのと同じだと考えるということである。

30日 終わりが肝心

「終末が仕事に冠す」

「終わりよければすべてよし」と同じ意味の言葉である。はじめは壮大でも尻切れトンボになって消えてしまうようなものもある。それではダメなのである。

仕事は結果を出すことによって評価される。結果がしっかりしたものになったとき、それが仕事の冠となるのである。

31日 毎日が最後の日

「各々の日を最後の日の夜明けだと信ぜよ」

ホラティウスの言葉。一日一日、最後の日が夜明けしたと思え、ということである。これはよくいわれることだが、「今日が最後と思って一所懸命やれ」という言葉である。この姿勢で日々を過ごせば、人生は豊かなものになっていくであろう。